



合文の例:「摂州大坂大図」全(外題)「個人蔵」より



ら、社会史ともつぎ合わせて考えていくうえで、地図の製作者の存在は無視できない。出版という観点で調べていくと、地図と政治との深い関わりが見えてくる。当時の都市政策が、一般の人が使う地図の刊行にも大きく影響していた状況が分かってくるわけだ。

島本 なるほど。

上杉 たえば大坂図や江戸図には武鑑の類が細かく書き込まれていますが、京都図にはあまり書かれていない。これだけでも、当時の都市の役割や性格が見えてきますよね。18世紀の大坂が政治的・軍事的にも非常に重要で、武士の町という側面もあったことが分かります。

小野田 武鑑や蔵屋敷などの情報を盛り込むため、合文が用いられた。初めは各



コラム「播磨屋の修正作業」より、図版の一部(神戸市立博物館蔵)

***13** たとは「新板大坂図」「原図」の場合、明暦3年(1657)の年記のものが最も早く、それから約90年間、板元を交わつて14種(複製を除く)が出版された。その間、大坂市の中核地帯形成や坂内の人々の暮らしといった変化が反映されている。

***14** 大坂城代、幕府の職名で、大坂の諸役人を統率し、大坂城守衛や西国諸大名の監督にあつた重職。

***11** 武鑑 江戸時代の大名・幕府役人の情報を収録した名鑑。

***12** 合文 武鑑や武鑑などの情報を記号とともに記載された対照表。地図には記号のみを振って置き、合文と照らし合わせることで、各等の宗派や蔵屋敷の持ち主などを特定できる。

島本 それだけ読者がこの情報を重視し、最新版が求められたということですね。

小野田 その通り。こうして元は同じ板でも、細部に修正が加えられ、多くのパリエーションが生み出されていきます。かと思えば、大坂城代が代わっても、いつまでも修正されずに放置されていることもある。それぞれの地図の用途に応じて、対象読者にとって重要な情報は頻りに更新されますが、そうでない情報には無頓着なわけでは。各図の特徴や改板時に刷り直されている部分を調べていくと、板元の販売戦略や読者の需要まで、ある程度推測できるわけですよ。

島本 刊行図はあくまで商品であり、ひとつの図を板木から作るにはかなりの手間とお金がかかる。同じ板をできるだけ長く使いつつ、誤りや古い情報を効率よく修正するための工夫がなされていたんですね。

上杉 板木の修正に関しては、解説編コラム③に詳しく書きましたが、播磨屋の一件が面白かったです。播磨屋九兵衛は19世紀前半の大坂図出版の最大手でしたが、おそらく出版許可が下りる前に、増修改正摂州大坂図(全)〔増修改正工〕を印刷して、出版直前になって、お上からクレームがつか、あわてて修正をしたというものです。現在確認されている同図には、きちんと板木から修正されているものと、印刷済みの地図に上から紙を貼って書き直したものとがあり、修正作業はかなり慌ただしく行われたことが想像できます。お上から訂正命令が出たことは「大坂本屋仲間記録」の「出勤帳」に記載があり、2種類の異なる修正版を比べることで、その実態が確認できたわけです。文書と地図資料の相互研究が交差した例でしたね。

島本 「大坂本屋仲間記録」には、ほかにも大坂図の板木の帰属をめぐる本屋同士の間争論の記述がありました。そうした記録を踏まえて、刷られた地図から板木の状態



コラム「刊行大坂図の袋から」冒頭頁

原図調査環境の向上

島本 僕にとって今回の調査で一番面白かったのは、同系統の地図を数多く比較する作業の中で、地図を見るたびに、常に新しい発見があったということ。そうやって同じ図が見えない図でも、よく見ていくと表裏が異なる部分があったり、印刷時の汚れや板木の継ぎ目の違いがあったりなど、本物を間近に見ることの大切さを再認識しました。

小野田 刷り板の違いといっても、パッと見ただけでは気づかないようなごくごく細かい違いなんですね。そういう小さな相違点を見つけるために、地図を複数の目で見ることは重要だったと思います。ひとつで行なう研究では、どうしても見落としや思い込みが出てくる。今回は複数の執筆者が同じ図を見て解釈を検討することで、テーマを広げることができたし、解釈の妥当性も向上したと思います。

島本 ちょっとしたマテリアルな痕跡から刷り板の違いが判明したこともありましたが、技術の進歩もそれを後押ししてくれてと思います。今回の調査では多くの地図をデジタル撮影したことで、原図調査の際も細部の比較が容易になりましたし、現物を調査できなかった図についてもデジタルデータを手で触れたので、細かい検討がやすくなったのは良かったです。

小野田 僕の若い頃とは相当環境が変わりました。かつては個人のコレクターが独自に研究していた、それはそれで成果もあったのですが、大勢の研究者が同じ資料をもと

に議論するという、かつての時代ではなかつた研究方法を実践できたよね。

「モノ」としての地図の面白さ

島本 地図面だけでなく、袋の種類や料紙(印刷紙)の貼り合わせ方、折り方など、資料そのものに目を向けたことも、地図研究の中ではほぼ初めての試みではないでしょうか。

上杉 これまで地図研究者は地図面ばかりに価値を置いていたが、今回の調査を通して、「モノ」としての地図資料も重要であることを痛感しました。この違いから、板の違いを判断することもありました。

小野田 僕や大澤さんのような、日頃から博物館でまとまった数の現物資料を扱っている人間は、地図の素材や外側の形式の違いにも気がつきやすいのですが、学問研究としては、どうしても中身に目がいきますからね。

島本 内容に秀でず形式が重要ということですが、折り畳んだ地図を取納する「袋」は大坂の風物を描いた絵や板元の広告が刷り込まれるなど、さまざまな意匠が凝らされていて、出版物、商品としてアピールするための工夫が感じられます。また同じ図なのに、折り方や表紙を愛でて別の地図として売ったりしている例もあつたんですね。あれは刷版の違いなのか、あるいは経師屋の違いなのか、理由は判然としませんが……。

島本 料紙についても、普通に考えれば板木のサイズに合わせて作れば合理的で、たしかに幕末期には「長・長・短」と寸法の異なる紙を貼り合わせた形を並列に組み合わせたり、端切みした紙を要所要所に貼り合わせたタイプもありました。たしかに面白い精神ゆえか、紙を丈夫にするためかとも思いましたが、推論の域を出ないですね。

小野田 ほかに板元の印、印刷紙のエンボス加工など、地図には物質的にも様々なパリエーションがあり、資料論的な研究がまだできると思います。本書では十分な分析ができていないと言えませんが、地図の表紙や袋の画像を掲載して問題提起できたことは良かったと思います。

どのように活用するか

島本 こうして体系的な集積ができたことで、逆に入ります多くの謎やテーマが発掘された大坂図研究ですが、今後、この本を用いて、どのような分野での研究の展開が期待されるでしょうか。

小野田 さきほどは地図と歴史、経済、政治との関わりに触れましたが、時代が下るにつれ、海岸線が埋め立てられたり河川や土地が整備されて、新地として開発されていく過程が、地図には克明に記されている。また寺院や橋などの主要な建造物の変更もまたことが多々あります。都市史、都市計画はもちろんのこと、土木建築や、地学、地理の分野にも活かせる情報がたくさん詰まっています。

島本 収録図の資料批判の点でも相当レベルアップしていますので、地図そのものの研究だけでなく、古地図から読み取れる多岐にわたる膨大な情報を、多くの分野で応用していただきたいですね。本書に収録した「近世刊行大坂図系統樹」と「書誌目録」が、重要な資料になることは間違いないと思います。「系統樹」は近世刊行大坂図の系譜を家系図の要領で視覚化したもので、各図の刊行時期や期間、パリエーションの多さ、新板や板木継承の関係、板元などが一目で確認できます。

小野田 この系統図は、本が三分かや四分か、インフォグラフィックには板元、刊行年、上杉 また「書誌目録」には板元、刊行年、推定出版年代などの基本的な書誌情報に加え、法量や板・彩色、所蔵機関などの資料情報、そして城代・定番・町奉行名や資料として扱う際に注目すべき点などの歴史的情報も網羅しており、地図、歴史研究にすぐ役立つデータベースになっています。

小野田 研究によって地図の解釈は変わってきますが、書誌データは解釈の基盤になる、非常に重要なものです。さまざまな研究・議論のために共有するべき、近世刊行大坂図に関する現時点での最大の基礎情報を整理統合し、その作業を通して見えてきた多くの問題提起を行なったということが、本書の最大の成果だと思います。

上杉 この本にはこれから地図をもとに研究をするすべての方にとって、研究のネタが山のように落ちていくので、僕らもできる限り論文や解説、コラムで拾い上げて

次は日本図集成をやりたい

上杉 今後本書に載っていない新しい図が出てくると思います。今回の調査でも、板木の状態からしてきつとほかにもパリエーションがあるはずだと思われている図が、いくつかありました。新種の地図が発見され、刊行大坂図の研究がどんどん進んでいくのが楽しみです。とはいえ、あまりにたくさん収録できていない図が出てくる、ちょっと悲しい気もしますが(笑)。

小野田 古本屋さん、骨董屋さんはぜひこの本を座右に置いて、古地図が手に入った本と照らし合わせて、同定していただきたいですね。お持ちの古地図がもしかしらな見つかってこない、新種の板かもしらな見つかってこない、高額の図はありますが、古地図ファンの方は、ぜひ古本屋さんなどで本物を手に入れて、本書の地図と見比べてはいかがでしょうか。

上杉 大坂図だけでなく江戸図、京都図にしても、目録から漏れている図はいくらかあるでしょうし、それらをまた蓄積して、本が作れたらと思います。とはいえ、これで江戸図・京都図・大坂図と三大都市の目録はできたことだし、次は日本図の集積をやりたいですね。

小野田 日本図か、「日本図」はもっと大変やで(笑)。

島本 次はいついかなる年かかるとは、本が作れるのか分かりませんが、「近世刊行大坂図集成」を眺めながら、気長にお待ちいただければと思います。

2016年4月8日(日) 於 創元会議室

論じていますが、網羅しきれなかったとしてもたくさんあります。これから地図史、少なくとも都市図をやるという人は、必ず本書の内容を消化して、研究をさらに発展させてほしいと願っています。

近世刊行大坂図系統樹

インフォグラフィックとしての「近世刊行大坂図系統樹」

近世日本経済の中心として栄えた商工業都市大坂。その姿を木版に刻み込んだ刊行大坂図、30系統182種を体系的に収録解説。「論文×図解×複数の研究者」による多角的アプローチで従来の研究水準を一新する、決定版にして永久保存版。

数多くの国内所蔵図を高解像デジタルカメラで新たに撮影、さらに米国・カナダ・オランダ各国所蔵の秀麗図も収録、研究に役立つことはもちろん、鑑賞にも耐え得る豪華大判。

●脇田修 [監修] 小野田一幸・上杉和央 [編集]

近世刊行大坂図集成

創元社 <http://www.sogensha.co.jp/>

(本社) 大阪市中央区淡路町 4-3-6 TEL(06)6231-9010 (代) FAX(06)6233-3111 (東京支店) 東京都新宿区神楽坂 4-3 煉瓦ビル TEL(03)3269-1051 (代)

本書を推薦します(50音順・敬称略)

川村博忠 (東亜大学客員教授)

杉本史子 (東京大学史料編纂所教授)

数田 貴 (関西大学文学部教授・兵庫県立歴史博物館館長)

特別付録

原寸複製「新板大坂之図」

(板本・丸屋庄左衛門) 刊行・寛文元年(1661年、神戸市立博物館蔵、菊全判折込仕様)

定価(本体45000円+税)

【内容見本進呈】

※数社ホームページからも閲覧できます。

近世刊行大坂図集成

(本書における被差別身分に関する事項の扱いについて) 古地図には作製された時代の政治状況や社会状況を反映し、被差別身分に関する事項が表現されている場合があります。本書が扱う刊行大坂図のなかにも、そのような表現が見られる図が多数存在します。しかしながら、差別や偏見が歴史の形成に与えた影響を明らかにし、正確な認識を得ることが不可欠であるとの考えに立脚し、改変することなくそのまま掲載しています。